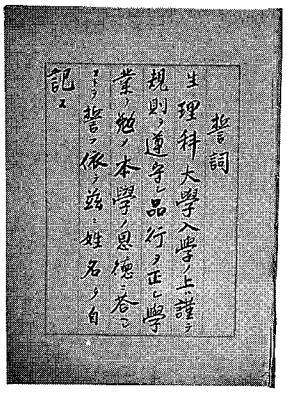
ISSN 0915-3284

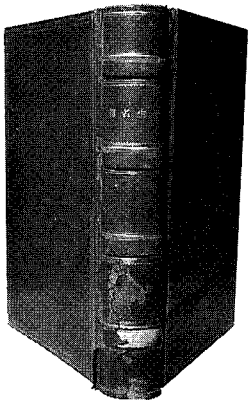
東京大学史史料室ニュース

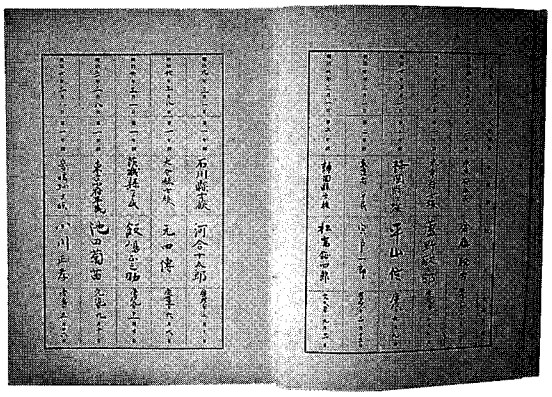
第18号　1997・3・31

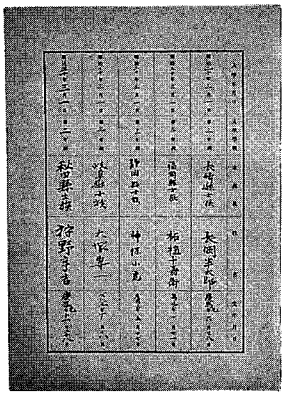
目　　次

東京開成学校の理化学教師
Edward Warren Clark について ……2
戦後大学生活史としての東大生協50年史……5
大学一覧について……6
受贈図書一覧……9
史料室日誌抄録 ……10









理科大学（理学部）学生名簿

東京開成学校の理化学教師 Edward Warren Clark について

藏 原 三 雪

1．E. W. クラークからW. E. グリフィスへの書簡

Edward Warren Clark（1849－1907）は明治４年10月１日より同７年10月９日までの契約期限で静岡学問所のお雇い外国人教師として雇われ、付設伝習所で理化学の実験を中心とした授業を行った。しかし学制発布に伴って福井のグリフィス（明新館）と同じように静岡との契約は中途の段階でフルベッキからの強い要請によって明治６年12月23日より東京開成学校理化学教師として雇われることになった。（「傭外国人教師．講師履歴書」第１冊上巻　58、東京大学総合図書館参考室所蔵）

これまでクラークは科学史、数学史、思想史、キリスト教史、教育史など様々な分野で取り上げられて来たが、彼の行った理化学教育の実際についてもう少し明らかにできないものか考えている。

彼は明新館ですでに教えていたグリフィスとアメリカニュージャージー州のラトガース大学のクラスメイトであった。1869年ラトガース大学を卒業すると、神学を学ぶためにジュネーブの神学校へ入学した。この年の夏休みグリフィスとグリフィスの姉マギー（Margaret Griffis 愛称Maggie）の３人でヨーロッパ旅行を楽しんだ。（Edward R. Beauchamp “An American Teacher inEarly Meiji Japan” pp. 58-60）

彼はグリフィスが来日するとすぐに自分も日本で教えたいと希望を持って、勉強を始めた。さらにその意志をグリフィスに伝えるだけでなく、グリフィスの家族にも早くから伝えていた。グリフィスの母はグリフィスに「クラークは日本で雇われることを願っています。」（1871年６月21日）と伝えていた。従ってクラークは偶然に来日したのではなく、友人グリフィスの日本での様子を知りながら、自ら来日の意志を持ったのであった。そのためグリフィスは「クラークにふさわしい仕事がないか」たえず気にかけていたのである。駿河からの外国人教師の人選の依頼はこのような状況の時にグリフィスにされた。（1871年７月25日 “Griffis's Journal”）クラークの仕事を見つけることに少々悲観的であったグリフィスにとってこの申し出がどんなにうれしかったかは想像に難くない。こうしたクラークの交友関係はその後の彼の活動を理解する上で重要である。

クラークは日本に向けてサンフランシスコから船上の人となってから（1871年10月17日）1873年10月28日までの２年間に17通の書簡をグリフィスに送っていた。この中で理化学教育に関するものについては別の機会にゆずるが、ここでいくつかのエピソードを紹介したい。

2．クラークと富士登山

クラークは1872年６月５日に「富士山の高さの測定をしたいと思って、そのための気圧計があります」とグリフィスに伝えていた。これは彼が作ったものだった。準備してから１年３カ月以上もたってようやく彼は1873年９月16日と17日の２日間富士登山の念願を果した。９月16日はちょうどその２年前に Albany から日本に向けて出発した日であり、来日２周年を記念する意味もあったという。それに17日は特別の休日であったのでこの２日間を利用しての計画だった。

「９月16日午後２時ごろに静岡を出発した。丸一日かかって富士の噴火口近くまで行くことができた。ヒュッテには人はいず、私は“この恐ろしい山”にほとんどたったひとりだった。案内人はわたしひとりを残した。彼は空腹と疲労で半ば死にそうだといった。（というのは山で食べ物を手に入れることができなかったから）そして私といっしょにいた日本人の杉山は自分も今にも死にそうだと言って、山を下りてしまった。…

やっと私は約3000フィートのところで彼らに追いついた。そこはほとんど絶壁だった。そのため私は富士山の高さの測定をしたり、そのほかのものの見当をつけて見ようと思ったが、道具をもって再び頂上に立つことはできませんでした。」（クラークは Aneroid（barometer）と彼の作った水銀気圧計と温度計を用いてある地点での高さを推測する試みをした。）「私は噴火口から降りてきた自分のいる地点までの距離を測って、富士山は実際には最大で11500フィート強であると思いました。従って Alcock の本に（富士山の高さは）13000、14000フィートと示された高さは本当は間違いだと思う。あなたはイギリス人達によって富士山がしばらく前に正確に測られたことを覚えているでしょう。高さがどのくらいであったか思い出せますか？ Japan Mail に報告されていたけれども、私の（Japan Mail）は無くなってしまいました。私はその数字を覚えていません。あなたはどうですか。できれば私に教えてください。」（1873．９．22）

クラークは長年の思いを果そうとしたが、暴風雨のために当初の予定のように富士登山とその高さの測定は進まなかったようである。にもかかわらず、自分の作った気圧計を使って富士山の高さの測定をあきらめてはいない。そして先人の記録と自己の記録を照合して正確な高さを明らかにしようとしたことがわかる。（グリフィスは明治４年８月23日から24日の２日間白山の登山をし、水の沸点の違いによって白山の高度測定を試みた。山下英一「グリフィスと日本」 pp. 172-193、近代文芸者1995．４）

3．静岡の実験器具はどこへ

静岡学問所でのクラークの担当科目は究理、化学と化学究理実験であった。彼はアメリカにいる間にグリフィスのアドバイスを受けながらニューヨークに行っ

て様々な種類の器具を注文し、もてる物は自分のトランクに入れ、そのほかは大きな５つの箱に積めて、パナマ経由で横浜に船便で送った。このようにクラークにとって試薬や器具は一つ一つ自身の目で確かめ探し求めた大切な物であり、それらがあって初めて「自分は授業をすることができる」と考えていた。従ってこれらの器具にたいする愛着をずっと持ち続けていたようである。そのため彼は東京開成学校（Imperial College）の理化学教師としての契約が交わされると文部省に対して３つの条件を申し入れた。（E. W. Clark "Life and Adventure in Japan" 1878、東洋文庫所蔵）その２番目に「私の理化学の（実験）器具を私といっしょに持っていくこと」（同上書 pp. 131-132）とあり、器具の運搬が特別に条件づけられたことが注目される。

こうして「すべての家具」は６マイル離れた港に運び、船で送ったが、「理化学の（実験）器具を入れた６つの大きな箱は船で送ることができないので、箱根の山を越えて100マイル離れた東京まで男たちに背負われて運ばれた。」（同上書 p. 132）とクラークは記している。壊すとすぐに代わりを手に入れることができないアメリカからはるばる運んできた試験管やフラスコ、エアポンプなど実験に使った器具類やクラーク自ら作った気圧計などはまだ欧米の理化学教育が普及していない当時にあっていずれも"宝物"であったに違いない。だから開成学校へ着任にあたって全ての器具を東京に運ぶこと、しかもこれらの運搬を船ではなく人の手によって運ぶという注文をつけたことは納得のできることである。

ところでこれらの器具は開成学校の授業でクラークが使ったはずであるが、その後それらの行方はどのようになっているのであろうか。確かめたいと思う。ここ数年の間に大阪（舎密局や旧三高）の実験器具類が京都大学（たとえば「第三高等中学校時代（明治二〇－二七年）の京都大学旧教養部所蔵物理実験機器の分析」永平幸雄ほか日本科学史学会第41回大会1994. 5. 研究発表講演要旨集 p. 46）で、また旧制第四高等学校の実験器具類が金沢大学（1996年日本物理学会第51回年会　馬替敏治ほか「旧制第四高等学校物理教育用実験機器」同講演集 p. 277）でと発掘と史料の整理が進みつつある。器具類を直に見ることによって当時の理化学教育の実際の展開過程にたいしても関心が高まってきたように思われる。同じように南校や開成学校で使われた実験器具の調査、発掘が進められると明治初期、東京帝国大学発足以前の日本における西洋科学導入の具体的な過程の解明に大きな意味を持つと思われる。

４．クラークとマギー

クラークはグリフィスの姉マギーにたいして特別の感情を持っていたようである。彼はグリフィス家の家族と交際があったが、マギーはそのなかでも特別な存在であった。「あなたのお姉さんのマギーはあたかも彼女のもう一人の弟のように私を心から迎えてくれました。…マギーと私はいっしょに以前見たたくさんのすばらしいものの写真や昔の様々な思い出にひたりました。…私はマギーがいつか日本に来るかもしれないというある漠然とした予感を持っています。彼女の心はすでにこの方向に動いているそうです。…彼女はすばらしい女性です。私はマギーが Mrs. Pruyn の献身的な仕事にいつか参加されることを願っています。そして私のサジェスチョンで Mrs. P はマギーに（そのことを）手紙に書きました。」（1871. 10. 17）

マギーを慕っていたクラークはマギーが来日するとグリフィスとふたりを駿河に招いて「できるだけ永く滞在してほしい」と願い、また「私たち（マギーとクラーク）はジュネーブの経験を再演するでしょう」（1872. 6. 5）とかつてのヨーロッパ旅行の再現を期待し、大喜びしている気持ちをそのままグリフィスに伝えている。さらに翌月7月24日には "My Dear Mademoisell" Maggie" ではじまる７行ほどの短い手紙は "Welcome" の言葉であふれている。

こうしてマギーも竹橋女学校と呼ばれた日本で最初の官立女学校のお雇い外国人教師となった。様々な偶然とまたある意味での必然とが絡み合いながら明治維新期のお雇い外国人たちが来日してきたことを知る一例である。

なお本文で用いた Clark's Letters 及び Griffis's Journal はいずれも Special Collections and arcives : Rutgers University Libraries 所蔵から筆者がコピーしたものである。

（武蔵丘短期大学）

It is true that a few months ago I anticipated going to Higo, (near Satsuma,) & there were really some probabilities of my going there, – even up to the time that I left home.

But your letter asking me to go to Sumunga, I considered, & do consider, as definite & decisive, & inasmuch as I had not previously bound myself to Higo or any other place, I am expecting now to fulfil the contract which you have made for me with Sumunga,

Pacific Ocean. Lat. 30°24" (North.) Long. 171°44" (East.)
Steamer "Great Republic" Oct. 17th 1871.

Dear Griff:

You hardly anticipated that the answer of your long & interesting letter to me, would be dated on the Pacific, yet so it seems to be! However, such apparently prompt action on my part, in obeying your majesty's summons, could scarcely have been expected, were it not for other addition-

戦後大学生活史としての東大生協50年史

高　橋　陽　一

東京大学の歴史の全体像をトータルに把握しようとすれば、学術研究や文教政策という大学本来の表の部分とともに、そこで学び働いていた人たちの日常生活の部分、つまり衣食住から教育・研究にかかわるモノへの関心が起きてくる。考えてみれば、初等教育史研究では、佐藤秀夫氏の『ノートや鉛筆が学校を変えた』(1988年）という問題提起的な書名にみられるように、児童にかかわるモノへの関心は決して小さくない。また高等教育史研究でも、旧制高等学校史では衣食住の本拠たる自治寮は関心の焦点とも言える位置を得てきた。しかし、大学史ではモノへの関心、生活への研究は全くといっていいほど進んでいないのが現状である。

現在、東京大学の大学生活を、それを支えた組織の側から捉らえ直そうという試みが進行中である。すなわち、1946年６月７日の東京帝国大学協同組合（東大協組）の創立から50年が既に経過した東京大学消費生活協同組合（東大生協）による50年史編纂事業である。すでに『東京大学百年史』（通史二）では東大生協創立の頃の事情が紹介されているし、東大生協も『東大生協二十五年運動史』（1973年）を刊行している。しかし『百年史』は創立時の概要が中心であり、『二十五年運動史』は「運動史」的な方法論から、トータルな大学生活史あるいは生協史とはなりえていない。学生や教職員のリアルな生活実態とその変化、それを支えるモノの需要と供給の変動、そしてその接点となる食堂、書籍部、購買部といった各種店舗の施設と経営の実態を描きだすことが、今日の課題ではないかと考えられる。

東大生協50年史編纂事業については、私もその企画段階から関わってきたので、この計画や現状について紹介したい。東大生協は、この編纂事業を、ありがちな自画自賛の沿革史づくりではなく、生活文化をつくりあげる生協本来の使命を踏まえた教育文化事業と位置付けている。すなわち、学術的批判に耐え得るとともに、大学の福利厚生の進展に寄与しうるデータベースとして活用できる年史を目指すことを方針としている。具体的には、1998年度に『東大生協50年史・史料篇』、2000年度に『東大生協50年史・通史篇』の全２巻を刊行する予定である。

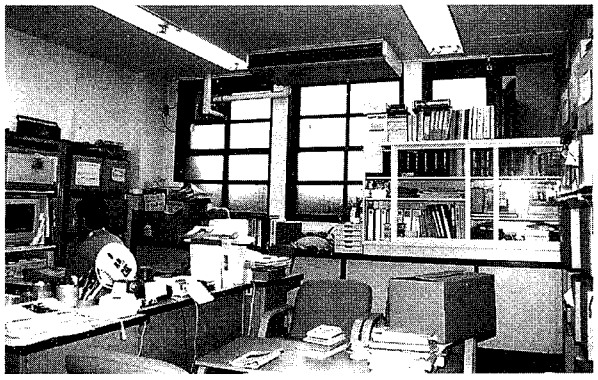


図１　東大生協史史料室の概観

図２　東大生協史史料室の発行物

事業は、1992年４月には年史の史料の保存・整理や編纂事業の中心となる「東大生協史史料室」が設置されたことからスタートした。図１は現在の史料室の様子である。『二十五年運動史』編纂の段階で蒐集された史料が未整理のままになっており、これら各種史料を電算機を使用して目録に整理する事業から開始された。また、創立時からのメンバーやその後の役員・従業員は今日も交流が続いており、こうした方々から積極的な協力を受け各種のヒアリングや史料提供を受けることが出来た。こうしたヒアリングの要旨を主な記事として1995年３月からは『東大生協史通信』を創刊し、現在第３号を編集中である。また、東大生協は現在、55,403人（95年現在）の教職員・学生を組織しているが、これら組合員への提起的な情報提供として月刊の『生協ニュース』紙上に、1995年12月より「東大生協史史料室だより」としてトピックごとに情報を提供している。創立50周年にあたる1996年度には、全店舗を挙げてこれを祝う企画を行い、同年11月９日には「東大生協50周年記念の集い」を持つことができた。年史編纂に事業の基幹である資料の蒐集・整理・保存とともに、同時代史特有の作業である関係者のヒアリングとその情報還元としての『東大生協史通信』、組合員への「東大生協史史料室だより」などによる広報活動といった形で、小規模ながらも複合的な年史編纂事業を展開していることになる。

次に現在整理している史料の一端を紹介したい。現在データベースに登録されている史料は以下のようになっている。

１９４０年代	１８７件
１９５０年代	７８０件
１９６０年代	９７１件
１９７０年代	６００件
１９８０年代	３４０件
１９９０年代	１９件
合　計	２９４０件

合計には年代の未判定のものを含む

史料件数については、簿冊を１件と数えた場合や文書ごとに分けた場合があるので単純な比較は出来ないが、初期の頃からかなりの史料が継続的に存在することがわかる。1980年代以降がむしろ少ないのは、目録化を初期の史料から優先しているためと、総務課や理事会室などで現在も活用されている資料が多いためで、こうした資料も順次、移管や目録化を行う予定である。

史料の基幹となるのは、総代会に提出される『事業報告書』（『総代会議案書』）である。これは創立当時からほぼ欠落なく保管されており、貸借対照表・損益計算書や店舗ごとに供給高（一般企業の売上高に相当）などの基本的な経営数値はもちろん、当時の活動の状況が記録されている。ただし、この史料については、総代会前の議案と後に作成される「議決書」、また各種活動の分冊など異本が多く、注意が必要となる史料である。

大学や監督官庁への届、さらには関係業者との各種契約なども重要な史料である。図３には1940年代の委託業者との契約書類の綴の一部を掲載した。特に初期の東大協組ではプリント印刷や時計修理など専門技術の必要とする部門には委託業者と契約して営業を任せるスタイルが採られていた。また図４は、1949年２月23日の東京大学消費生活協同組合設立総会を経て、消費生活協同組合法による法人登記をする際の申請書の控である。総長南原繁理事長をはじめ、大学関係者の名前と印鑑が見える。

このほか、生協の各種発行物も貴重である。『生協ニュース』は1950年４月の創刊以来継続的に発行されているし、店舗や支所ごとの発行物なども当時の生活を伺う貴重な情報である。また1964年に開始された学生の消費生活に関する実態調査及び教職員生活実態調査も、継続的に行われた貴重な史料である。本学の学生調査は、1950年から開始された東京大学学生生活実態調査に定評があるが、生協による調査は学生の消費行動など豊富な項目を含み独自のデータを提供している。またこの調査はその後現在にいたるまで全国の大学生協でも共通して取り組まれているので、比較分析が可能となっている。また職員調査は大学では行われないので極めて貴重な史料と言える。

図３　委託業者との契約書綴

このほか、一高雑貨部から合併された駒場支部や1946年２月創立の農学部協同組合から合流した農学部店、教職員中心に運営されてきた麻布支所、医科研支所、天文台支所、先端研支所などキャンパスごと、店舗ごとの独自の歩みをもつ部門が多くある。

全国の生協による沿革史編纂は今日まで多くのものが世に送り出されているが、『東大生協50年史』編纂事業は、広く大学生活を歴史的に明らかにする試みとして先進的なものであると考えている。最後に読者のみなさんにも史料提供やアドバイスなど是非ともご協力をお願いしたい。『東大生協史通信』などの発行物については残部があり、関心のある研究者や機関にはご寄贈したいと思うので、下記に連絡をお願いする次第である。

〒113　東京都文京区本郷7-3-1第二食堂建物内
東京大学消費生活協同組合　東大生協史史料室
０３－３８１４－４０６９（直通）
０３－３８１２－２１１１（大学内線７９４３）
（武蔵野美術大学）

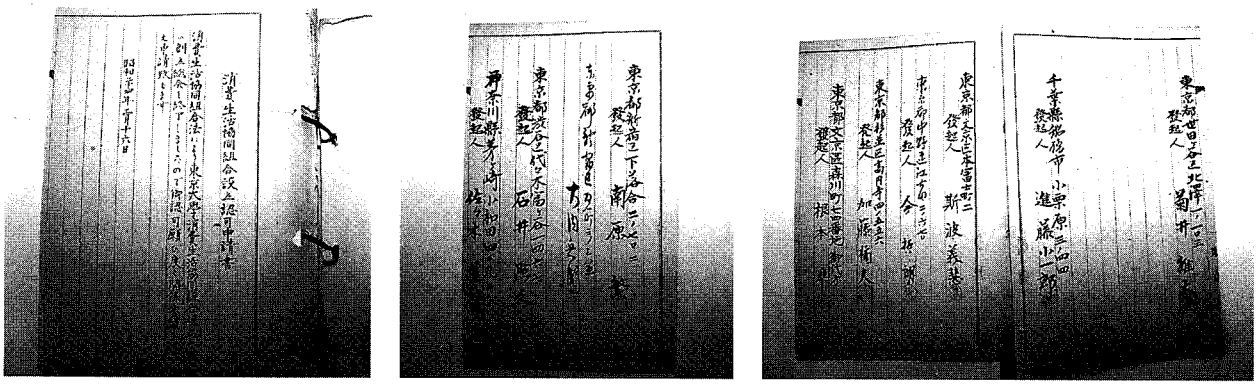


図４　１９４９年の法人登記時の書類

大学一覧について

中野　実

大学（学校教育機関）の全体像を捉えるには『一覧』(Callender）と『年報』(Annual Report）しかない。基幹資料、文献といってもいい。研究対象としての大学はどちらかといえば細分化され、史料は限定されがちになる。情報の発信源であると同時に収集拠点である大学を全体として対象化しようとすると、一覧、年報の重要性は強調してもしすぎることはない。今回は一覧を取り上げてみよう（なお、東京大学年報についてはすでに『文部省年報』所載の分も含めて東京大学史史料叢書として『東京大学年報』全６巻に復刻した。それぞれの巻末尾に年報の成立を含めた解説が付されているので、参照してほしい)。

一覧、年報の重要性にもかかわらず、その取り扱いは冷遇されてきている。学校沿革史誌類に関する多くの文献目録が編集され、刊行されているのに比べれば一目瞭然といえよう。学校一覧が、単行本として編まれた例を東北大学以外に、寡聞にして知らない。東北大学記念資料室では、同室が所蔵する約1700点の学校一覧を1988（昭和63）年８月に『東北大学記念資料室所蔵　学校一覧目録（戦前編)』(東北大学記念資料室研究叢書１　山谷幸司編、111頁）として刊行している。希有な例である。このほかにはさらに10年前に遡り1978年３月に渡辺宗助氏による「旧制高等学校『学校一覧』所在目録」(『旧制高等学校に関する問題史的研究』国立教育研究所紀要　第95集）が作成されているにすぎない。実に20年間に２つの目録のみである。ちなみに渡辺氏は図書館を中心に一覧の所在調査を行った。今後は図書館系列に入らない機関や施設、東北大学記念資料室や大学史史料室なども調査対象に据えていく必要がある。目録すらこのような状態であるから、研究状況は推して計るべしである。『名古屋大学史紀要』に発表された井上知則氏の「〈史料解題〉愛知（県）医学校・病院刊『院校報告』についての若干の考察」－『学校一覧類』の資料価値検討の一助として－」(第２号、1991年４月）ぐらいではないだろうか。ほかに大正大学資料室が資料集の一冊として大学一覧を復刻している。

一覧はいつころからどこの機関が編集、発行したのだろうか。国立国会図書館の『明治期刊行図書目録』によれば、もっとも古い時期は1875（明治８）年２月の『東京開成学校一覧』である。明治10年代に入ると東京大学、同予備門、東京外国語学校などの官立学校をはじめとして、『東奥義塾一覧』(1878年９月）などの私立学校も発行していた。この目録にはないが、専修学校でも1883年７月に一覧を編集、発行していた。学校情報を社会に知らしめる、存在をアッピールするといった広報活動は、我々が考えているよりも早くからはじめられていたのである。山谷氏は目録作成の過程で得た一覧に関する知見を３点にまとめている。第１は官公立の高等教育機関に関してほぼすべてに学校一覧の発行が認められ、発行に関する法令はなく各機関が定めた内部規定により行われた。この点は「年報」と大きく異なる。第２に配付は文部省等の行政機関への送付、教育機関の相互交換、あるいは卒業生などの教育機関関係者への無料配付が基本であり、一部に限定されるが帝国大学一覧などは市販もされていた。第３は掲載記事は統一する法令がなかったため各機関毎に様々なものになっており、同一機関でも発行年により相違する、ということである。

東京大学の「一覧」で具体的に見ていこう。東京大学の前身校を含めた一覧は表一の通りである（包摂校は除く)。表から分かるように国立国会図書館所蔵の一覧よりも早い「壬申四月改」と表記のある1872年の『南校一覧』がある（以下、東京大学一覧の記述は酒井豊「東京大学一覧について」(１～５)、東大百年史編集室通信　No.19-23、『学内広報』(No.405, 410, 415, 420, 420）に依った)。『南校一覧』は小冊子形態で、規則、舎則、授業時間割、生徒人名（等級別、出身府県、年齢併記）という内容である。一覧が毎年度の大学の概要を内外に示すものとすれば、『南校一覧』は先駆的な位置付けがなされる。一覧の記載記事を最大公約数的に挙げれば、沿革略、職員、主要な法令ならびに規則、各学部の学科目、附属研究施設の概要、旧職員・在学生・卒業生の氏名、参考表、施設図などである。ただ財政関係のデータは掲載されていない。市販の例を示せば、500頁余の1891（明治24）年－92年版の奥付には、編纂兼出版帝国大学、印刷所薬研堀活版所、売捌所丸善商社書店、定価30銭とある。一覧の記載事項中いくつかを選びそれぞれの掲載年代を略記しておく。

職員移動	明治44-45年版～昭和30-33年版
旧職員	大正 5- 6年版～昭和44-45年版
卒業生学科別年次別表	大正 7- 8年版～昭和44-45年版
卒業生全員の氏名	明治20-21年版～大正 7- 8年版
配置図	明治24-25年版～昭和44-45年版
学生出身、年齢、卒後職種	明治24-25年版～昭和44-45年版

冊子形態の一覧のなかにあって1873年３月の「第一大学区第一番中学一覧表」というおりたたみ式の大判（約36×55㎝）一枚刷りのものがある。官員、教官、教師、科目表、生徒氏名（表裏）からなっている（写真１)。一枚刷りの一覧表は記載記事からみると、さきの一覧とずいぶん異なる。一覧表がどうして作成されたのかという疑問は、機能的にはよく理解できる一覧がどのような理由から発行されたのかという疑問とも重なり、答えはいまだ出せていない。一覧表はこのあとにも発行されていた。たとえば1891年～92年の一覧略表は64×78㎝の両面活版印刷物である。一覧略表

は一覧が「大冊ニシテ一目其概略ヲ尽スニ便ナラス且其部数ニ限リアルヲ以テ広ク之ヲ頒布スル能ハス」ということで作られ、さらに「普ク入学志願者ニ便ニス」と受験者への配慮も考えられていた。要するに、一覧、一覧表、一覧略表と表一にある要覧の４つの種類が存在するのである。

ほかの大学ではどうだろうか。さきに指摘した『専修学校一覧』（1883年７月、復刻版）は22頁の小冊子であるが、内容は沿革略、規則－教旨・教則・入校退校・学費・雑則、校員－校主・講師・嘱託講師・特別講義員、卒業生徒からなっている。

『専修学校一覧』に付された解題（内山宏氏執筆）には次のような指摘がなされている。「『専修学校一覧』の原本の多くは小冊子であるが故に、あるものは文書綴りの中に忘れられ、あるものはその刊行形態を理由に製本を解きほぐされ、またあるものは無意識のうちに廃棄されてきた。組織的に保存が図られたものは、『専修学校経済学講義筆記』や『専修学校法律学講義筆記』の原本、あるいはそれが生み出した科目別の講義録、卒業生の記録などとともに関東大震災で焼かれ、そのほかは時代を経た現在、料紙を劣化し、内容が陳腐化したと判断された文書綴の文書などとともにに廃棄されて、散逸の度合いを強めているといえよう。」（７頁）。

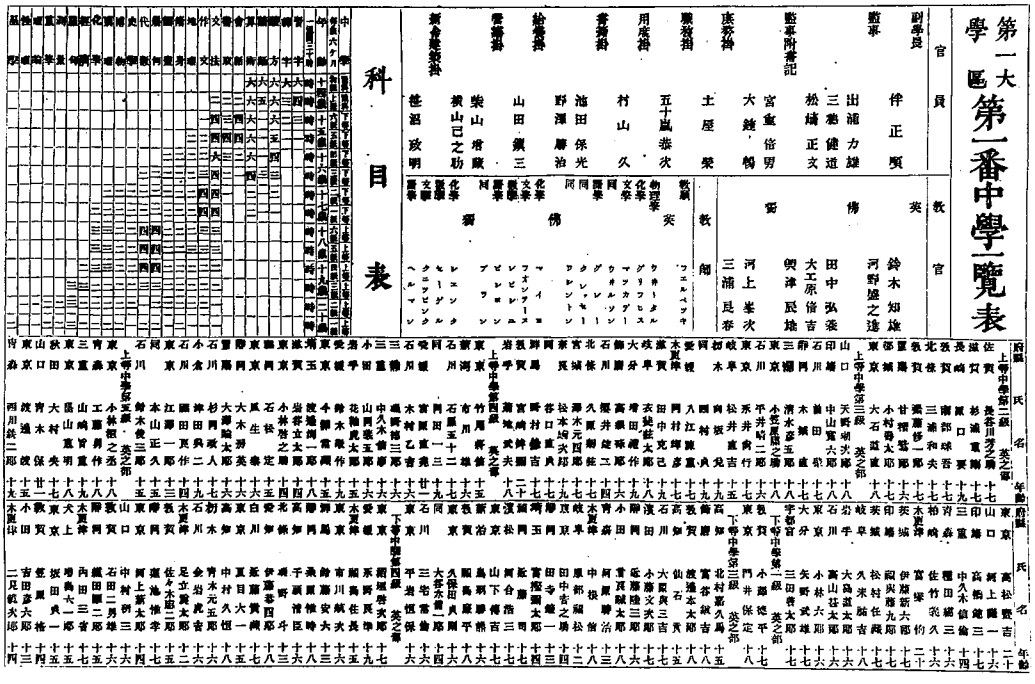
大学（学校）はいくつの情報発信媒体を持ってきただろうか。大学を知ろうとすれば学術研究成果としての紀要はその中核であるが、そのほかには同窓会報、自伝、伝記くらいであり、大学広報メディアとしての一覧、年報類の重要性をこの視点からも認識できるであろう。ただ現状はさきの内山氏の指摘に近い。せめて戦前期の高等教育機関一覧総覧を編集してみたいと、かつて６年前に志を立てたがいまだ実現できないでいる。

（室　員）

表１　東京大学関係「一覧」表

南　校	壬申四月改	東　校	
第一大学区 第一番中学	明治6. 3（一覧表）	第一大学区 医学校	
開成学校			
東京開成学校	明8. 2. 9	東京医学校	
東京大学法理文学部	明11 - 12（一覧略）、12 -13、13 - 14 14 - 15、15 - 16、16 - 17	東京大学医学部	明10、13 -14、14 - 15 15 - 16、16 - 17
帝国大学	明11 - 12 ～ 29 - 30	東京帝国大学	明30 - 30 ～大9 - 10、 大10 - 11 ～ 11 - 12（要）、12 - 13 13 - 14 ～ 14 - 15（要）、15 - 昭2、 昭2 - 3（要）、4（要）、5、 6 ～ 10（要）、11 ～ 17
東京大学	明18 - 27、28 -29（要）、30 - 33 34 - 34（要）、36 - 37（要）、38 - 39 40 - 41（要）、42 - 43、44 - 45	注：要は要覧の略、酒井氏によれば東京医学校明 9、10の2年分は外部機関に寄贈した記録はあるとのこと、医学部明12 - 13、17 - 18は未見、11 - 15、18 - 19は未刊と推測。	

写真１　第一大学区第一番中学一覧表



受贈図書一覧（平成8年3月～平成8年12月）

要覧　第14号
　埼玉県立文書館　平成8年9月
文書館紀要　第9号
　埼玉県立文書館　平成8年3月
鈴木（庸）家紋書目録
　埼玉県立文書館　平成8年3月
埼玉県関係行政文書件名目録　戦中戦後期編Ⅲ
　埼玉県立文書館　平成7年3月
回想の福武直
　福武直先生追悼文集刊行会　平成2年7月
宮城教育大学三十年史資料集Ⅰ
　同大学三十年史資料集編集委員会　平成8年3月
宮城教育大学三十年史資料集Ⅱ
　同大学三十年史資料集編集委員会　平成8年3月
二十一世紀を望んで
　脇村義太郎　平成5年12月
東大卒20代の会社生活
　川人博　平成6年3月
日本学術振興会－平成8年度－
　日本学術振興会　平成8年
日本学術振興会　事業の概要　平成8年度
　日本学術振興会　平成8年
向陵　第38巻　第2号
　一高同窓会　平成8年10月
レンズに写った沼津　アマチュア写真家が記録した戦前・戦後
　沼津市明治史料館　平成8年12月
筑波大学年次報告書（平成7年度版）
　筑波大学企画調査室　平成8年12月
我が国の文教施策　平成3年度
　文部省　平成3年11月
金城学院百年史
　金城学院百年史編集委員会　平成8年9月
麻布学園の100年　第1巻　歴史
　麻布学園百年史編纂委員会　平成7年10月
麻布学園の100年　第2巻　文集
　麻布学園百年史編纂委員会　平成7年10月
麻布学園の100年　第3巻　アルバム・年表
　麻布学園百年史編纂委員会　平成7年10月
東大97　まるかじり東京大学
　東京大学新聞社　平成8年7月
みみずくの独り言－鳩山道雄遺稿集－
　鳩山道雄　平成6年4月
研究と教育についての個人的考察／大学改革は1960年代から何を学ぶべきか
　ユンゲル・ヘルペスト　平成8年度
enryo 大正末期から昭和戦前期における私立大学の中等教員養成に関する研究　東洋大学の事例から
　豊田徳子　中野　実　平成8年7月
本郷座の時代－記憶の中の劇場・映画館－
　文教ふるさと歴史館　平成8年10月
平成8年度版　職員録（上）
　大蔵省印刷局　平成7年11月
平成8年度版　職員録（下）
　大蔵省印刷局　平成7年11月
盛田命祺東行日記
　慶応義塾福澤研究センター　平成8年3月
金城学院百年史
　金城学院百年史編集委員会　平成8年9月
学位研究　第5号
　学位授与機構　平成8年9月
人文論集　第31巻　第1号
　神戸商科大学経済研究所　平成7年9月
人文論集　第31巻　第2号
　神戸商科大学経済研究所　平成7年12月
人文論集　第31巻　第3・4号
　神戸商科大学経済研究所　平成8年3月
人文論集　第32巻　第1号
　神戸商科大学経済研究所　平成8年8月
富士論叢　第41巻　第2号
　富士短期大学学術研究会　平成8年10月
申奏録（5）　明治12年
　北海道立文書館　平成8年3月
研究紀要　第11号
　北海道立文書館　平成8年3月
開拓使文書（2）
　北海道立文書館　平成8年3月
埼玉県立文書館所蔵地図目録
市町村作成地図目録Ⅰ
　埼玉県立文書館　平成8年3月
法政大学史資料集　第19集
　同大学大学史資料委員会　平成8年3月
桃山学院年史紀要　第15集
　同学院年史委員会　平成8年3月
九州大学大学史料叢書　第4輯
　同大学大学史料室　平成8年3月
中央大学百年史編集ニュース
　同大学百年史編集委員会専門委員　平成8年7月
中央大学史紀要　第7号
　同大学百年史編集委員会専門委員　平成8年3月

受贈図書一覧（平成8年3月～平成8年12月）

中央大学史資料集　第14号
　同大学百年史編集委員会専門委員　平成8年3月
名古屋大学史紀要　第4号
　同大学史編集室　平成8年3月
わが歩みし道　南原　繁－ふるさとに語る－
　香川県立三本松高等学校同窓会「大中三高会」
　平成8年3月
関西大学百年史　資料編
　同大学　平成8年3月
大麻唯男　伝記編
　大麻唯男伝記研究会　平成8年5月
大麻唯男　論文編
　大麻唯男伝記研究会　平成8年5月
大麻唯男　談話編
　大麻唯男伝記研究会　平成8年5月
福岡工業高校百年史
　同高校創立百周年記念誌編集委員会　平成8年4月
中等教育史文献目録
　中等教育史研究会　平成8年8月
神戸市外国語大学五十年史1946～1996
　同大学五十年史編集委員会　平成8年6月
井出深沢家・多比山田家文書目録
　沼津市明治史料館　平成8年3月
学位研究　第4号
　学位授与機構　平成8年3月
一宮市博物館年報（4）　平成5・6年度
　一宮市博物館　平成8年3月
サティア《あるがまま》22
　東洋大学井上円了記念学術センター　平成8年4月
沼津兵学校関係人物資料目録
　沼津市明治史料館　平成8年3月
沼津市博物館紀要20
　沼津市歴史民族博物館／沼津市明治史料館
　平成8年3月
早稲田大学史紀要　第28巻
　同大学史編集所　平成8年9月
大学論集　第25集
　広島大学大学教育研究センター　平成8年3月
高等教育研究叢書38
　広島大学大学教育研究センター　平成8年3月
高等教育研究叢書39
　広島大学大学教育研究センター　平成8年3月
高等教育研究叢書40
　広島大学大学教育研究センター　平成8年3月
近代日本研究　12
　慶応義塾福沢研究センター　平成8年3月
台北帝國大学研究通訊
　台湾大学　平成8年4月
中央大学百年史編集ニュース26
　同大学百年史編集委員会専門委員会　平成8年3月
立命館百年史紀要　第4号
　同大学百年史編纂室　平成8年3月
立命館百年史紀要　別冊No.2
　同大学百年史編纂室　平成8年3月
関東学院学報　No.12
　同学院史資料室　平成8年9月
校史　VOL.3
　国学院大学校史資料科　平成8年8月
旧制高等学校記念館－その生い立ちと歩み－
　小澤行雄　平成8年4月
サティア《あるがまま》24
　東洋大学井上円了記念学術センター　平成8年10月
東洋大学人名録　役員・教職員戦前編
　東洋大学井上円了記念学術センター　平成8年3月
井上円了センター年報　VOL.5
　東洋大学井上円了記念学術センター　平成8年7月
戦後教育史研究　第11号
　明星大学戦後教育史研究センター　平成8年7月
「箱根八里」と作詞家・鳥居　忱
　壬生町立歴史民族資料館　平成8年10月
豊橋技術科学大学二十年史
　同大学　平成8年10月

史料室日誌抄録（平成８年11月～平成９年３月）

11. 30　土　『東京大学史史料室ニュース』第17号発行。
12. 10　火　第43回東京大学史料の保存に関する委員会開催。
12. 31　火　谷本宗生　教務補佐員　辞職。
1. 1　水　大島　宏　教務補佐員　採用。
1. 22　水　学生課から、昭和26年から27年にかけて開催された厚生補導研究会関係資料について照会。
1. 29　水　一高時代の机を駒場より運搬。
1. 30　木　広島県呉市海事博物館より、運営参考のため史料室を見学
2. 10　月　福島大学　谷氏来室。史料室の業務と施設などを見学。
2. 20　木　教育学部より資料運搬。
2. 21　金　医学部第二生理学教室　熊田衛教授から資料受入れ。
2. 27　木　東北大学百年史編纂室から『東京大学百年史』の配布先について照会。
3. 3　月～3. 9　日　イギリスへ学徒動員・学徒出陣の調査のため出張。
3. 6　木　史料室の燻蒸を行う。
3. 17　月～3. 19　水　同志社大学、立命館大学へ学徒動員・学徒出陣の調査のため出張。
3. 21　金　テレビの撮影。
3. 31　月　高橋陽一　教務補佐員　辞職。

この間の閲覧者数

学内者　４名
学外者　４０名

主な学外閲覧者所属機関

九州大学、広島大学、京都大学、群馬大学、名古屋大学、日本大学、韓国　浦項工科大学、東洋大学、大阪経済法科大学、武蔵丘短期大学、ＮＨＫサービスセンター企画開発室、渋沢史料館、㈱日立アプリケーションシステム

文献撮影・複写許可件数　３件
調査（照会）件数　３４件

表紙の説明

１９９７年４月、理学系研究科生物科学専攻図書室から寄贈された。学生名簿と題されているが正式には学生宣誓名簿であろう。１８８６年帝国大学誕生とともにはじまった、入学宣誓式における学生自著の宣誓簿である。大きさは約縦４３×横３３㎝、厚さ７㎝の大判である。１８８７（明治２０）年３月最初入学宣誓式が行なわれ、当時理科大学物理学学科３年生の長岡半太郎が巻頭を飾った。

題字　森　亘元総長

東京大学史史料室ニュース　第18号

発行日：1997年３月31日（年２回発行）
編集・発行：東京大学史史料室
東京都文京区本郷７－３－１
電話（3812）2111内線2036
印刷所：株式会社 芳文社
東京都新宿区新宿3-12-4

Archives Section of the University of Tokyo